
人間の真髓と向き合い続けた さねとう先生

～私が関わらせて頂いた足跡を振り返って～

横山美衣

2016年3月7日 さねとうあきら先生は、81歳の生涯を閉じられた。

◆出会い

1990年頃、「この子達の夏」という被爆者の手記を元に作られた朗読劇を、小学校5年生から70歳代の方までおよそ70名の市民で上演した。その時の脚本・演出・指導が、さねとう先生だった。私は先生のアッシー君兼雑用の担当を与えられた。それが先生との出会いであった。先生は朗読者に、**弱い心で泣いてはいけない、不条理に対する怒り、無念さがにじみ出ている手記だ、と強調しておられた。**

◆作品の上演

1992年ジョイントリサイタルの開催にあたって、弾き語りの脚本をお願いした。

母性三章、一章は鬼子母神のようにゆがんだ母性、二章は等身大の現在形の母性、三章は全てが昇華した仏のような母性、私がお願いした内容だ。帰りバイクに乗っていた私は、車にぶつけられ意識を失い救急搬送された。しかし、一ヶ月ほどの松葉杖生活も、何かを学びなさいと言う大きな力が働いた結果では、と後では思えた。

なぜなら、**出来上がった「山姥曼荼羅」は、闇も含め人間の真髓をえぐり出した上に構築された、深くごっつりした、ものすごい世界だったからだ。**三絃・箏で弾き語りはしたが、私などの浅薄な感覚では、到底先生の作品の入り口にも及ばなかった。再演のお話しもいただいたが、実現しないまま、先生は逝かれた。

◆先生と狭山市

1999年文団連が立ち上がると同時に三大事業を立ち上げたが、第一回「狭山市民芸術祭」企画公演は、図々しく先生をお願いした。狭山市を縦糸に、傘下団体を横糸に綴って頂けるよう依頼をした。先生は、「**これまでお世話になった狭山市ですから、ご恩返しのためにお受けしましょう**」とご快諾下さった。狭山市を知りたいとのことで「**狭山市史**」の内5巻ほどを、お持ちした。全てをお読みになるのに一ヶ月もかからなかった。その後、他のメンバーの協力の元、先生は、**様々な狭山市の伝統文化の現場に足を運ばれ、また、小学生を出演させるために足しげく小学校に通い、『狭山いまむかし』という狭山の壮大なページェント劇を書きおろして下さった。演出・指導も大変な情熱を持って行って下さった。どんな場合も決して手を抜く事はなさらなかった。**

それは第10回狭山市民芸術祭の時も同様であった。その時は、既に先生のお身体には動脈瘤が3か所見つかっていた。狭山の為に、文団連の為に、そしてその狭山に、**優れた本物の民話の世界を根付かせるために、文字通り身を削って取り組まれた。**

◆先生の想い

市民会館から狭山市の素晴らしさを表現する公演に関しての相談を受け、迷わずさねとう先生をご紹介した。一方、先生の作品『おこんじょうり』を全国で語っておられる村松真貴子さんが、狭山市でそれを開催したいと言うご希望が有るのでと、さねとう先生から会場の事でご相談を受けた。その両方が結びつき、2015年12月5日「さねとうあきらの世界」の上演が決まり、先生も大いに喜んで下さった矢先、6月2日の入院が決まった。「**動脈瘤が4つほどありまして、このままだと破裂するらしいので、取ってもらおうと思ひましてね、2ヶ月くらいで生還したら、12月の内容を考えようかと思ひます。12月が有りますからね、必ず頑張ってお返ししますからね**」先生の言葉だった。

しかし、次々と不都合が先生の身体を襲い、それを目指して頑張っておられた12月公演の出演も、直前でドクターストップがかかってしまった。

先生の思いを出来るだけ正確にご来場者にお伝えするために、前日先生をおたずねし、ヒヤリングをさせて頂いた。**先生は気丈に、いつもの笑顔で、しっかりと想いを伝えて下さった。そして「今回は残念ですが、何とか早く仕事を再開して、『狭山妖怪百選』を書かなくてはね」とあくまでも前向きでいらした。『妖怪百選』というのは池原昭治先生の発案で、お二**